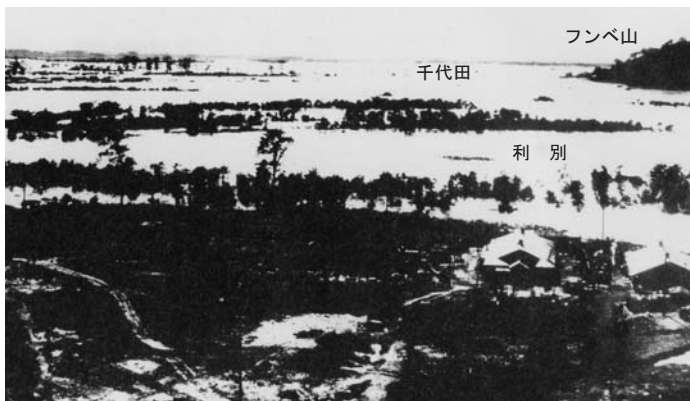


1. 十勝川大水害を防げ - 川を流れやすくする〔治水工事の例1〕

川で行われた大きな工事



大正11年の大洪水。今の池田町清見の方から、利別・千代田地区の方を見た写真。このころはここで十勝川と利別川が合流していた。



大正11年の大洪水の時の池田駅前。水に入って作業する人たち。

(1) 開拓する場所は低い土地が多い

開拓する人の多くは、できるだけ平らで土が肥えたところ、つまり川の近くの低い平野を開きました。こうした低い平野は、洪水になると水をかぶりやすい場所です。

特に明治31年(1898)、そして大正11年(1922)の洪水は、十勝川の周りが湖になってしまうほどで、それぞれ21人と9人の人が亡くなりました。開拓した畑をあきらめ、別の場所に移ったり、農業自体をやめなければならない人もたくさん出ました。



大正11年の大洪水の時の止若橋(猿別川。今の国道38号の橋、幕別町)

写真は3点とも「十勝川写真で綴る変遷」より

川にすなごのふたんの書

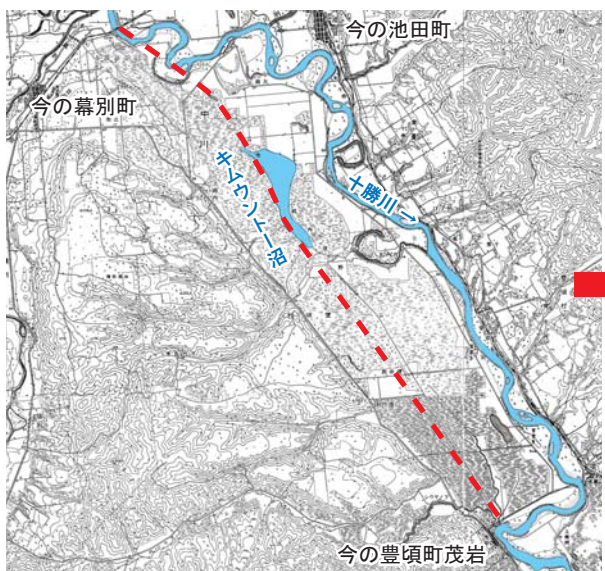
川にすなごの農業

川にすなごの漁業や工業

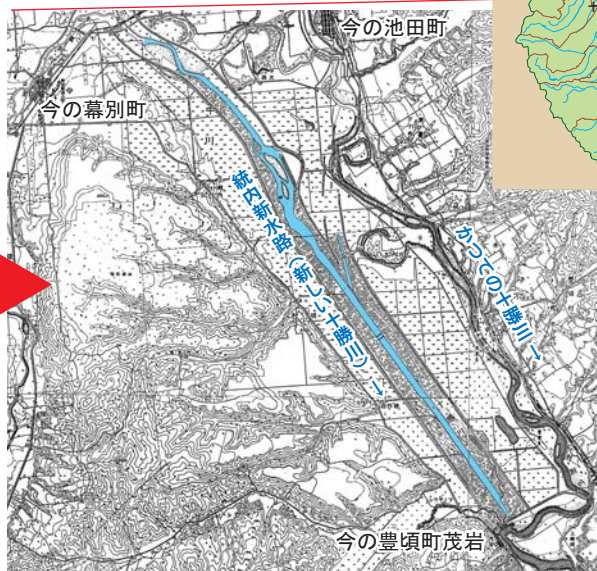
(2) 十勝川をまっすぐに

このころ十勝の川は、ほとんど自然のままの流れでした。自然の川は曲がりくねり、ひとたび洪水となると、水があふれやすく、また、なかなか水の量が減らない「暴れ川」となってしまう。

そこで、十勝川の中・下流部の流れをよくするために、^{とうないしんすいる こうじ} 統内新水路工事が始まりました。(→ 川の水の流れをよくする p74)



大正9年ごろの十勝川中～下流部。赤の点線が新水路の計画。(この地図は国土地理院刊行の1/50,000地形図(十勝池田・常室・糠内・浦幌)を使用しました。元図の25%に縮尺、十勝川などに着色)



昭和20年ごろ。左の地図と同じ範囲。新水路(水色)ができています。(この地図は国土地理院刊行の1/50,000地形図(十勝池田・常室・糠内・浦幌)を使用しました。元図の25%に縮尺、新水路に着色)



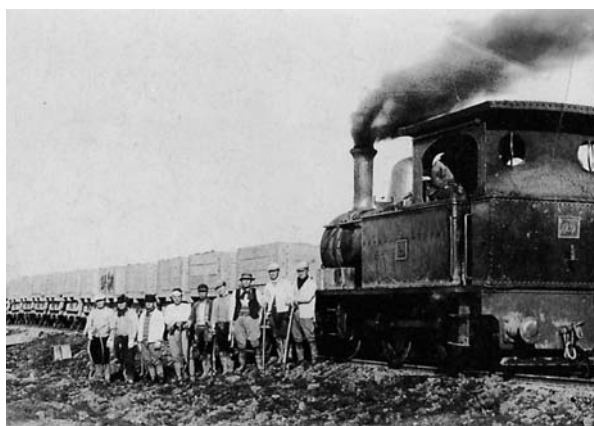
付録

とうないしんすいろう
(3) 統内新水路

統内新水路は、今の池田町・千代田から豊頃町・茂岩までの、約15km間にほられました。

この水路には、洪水をスムーズに流す役目のほか、新水路の両側に広がった原野、湿地の水はけを良くして、田畑に使えるようにするという目的もありました。

昭和3年(1928)に、工事は始まりました。そして昭和12年(1937)、だいたい完成していた水路に洪水で水が流れこみ、新たな十勝川となりました。



蒸気機関車と作業をした男たち。工事現場には線路がしかれ、工事のためだけの機関車が走った。

こうすい かんきょう
(4) 洪水を減らし、環境も考えて

こうしたまっすぐな新水路は、洪水の被害を減らし、新しく農地や住宅地として使える場所を造り出しました。

一方で、開発が十勝全体に広がると、自然の生き物が少なくなっていました。まっすぐにした川も、自然の生き物から見ると良くない点がありました。

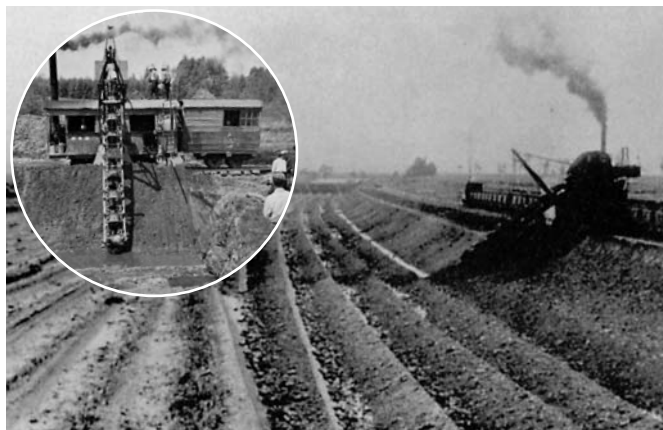
川が曲がりくねると、流れの速さや深さ、岸のかたちが変化に富みます。いろいろな環境があることで、川にはいろいろな生き物がすむことができます。

まっすぐな水路には、こうした環境が少なくなります。

最近では、ただ洪水を流すだけでなく、自然の生き物にもやさしい工事が考えられ、行われるようになってきました。



大きくなると、川岸が深くえぐれた場所にすむといわれるイトウ。(幕別町ふるさと館)



ベルトコンベアー式ラダー・エキスカベーター(※1)という機械でほっている。円内は、少し小型のエキスカベーター。



新水路に流れこむ支流も、広くまっすぐにする。

四角い写真は「十勝川写真で綴る変遷」より、また円内写真は「十勝川治水史」より



十勝川の統内新水路。豊頃大橋(豊頃町)から上流を見た写真。



統内新水路。豊頃町・茂岩上空から上流を見た写真。

川で行われた大きな工事

川につながる
 ふだんの暮らし

川につながる農業

川につながる漁業や工業

付録

※1 エキスカベーター：土をほる機械。この当時は、ベルトコンベアーにバケツのようなものがいくつもついていて、ベルトを回転させることで土をほった。最近では、パワーショベルがこれに当たる。